THE RECORD GEIJUTSU
http://www.ongakunotomo.co.jp/
1973年8月2日第3種郵便物認可／2012年12月1日（毎月1回1日）発行／第61巻第12号（通巻747号）

レコード芸術 12

2012
Vol.61 No.747

特集

百年祭の巨匠たち

——ヴァント，チェリビダッケ，ショルティ……1912年生まれの大指揮者を聴く

［今月のアーティスト］クリスティーネ・シェーファー

［付録CD連動企画］

INTERMEZZO ARCHIVES
日本のオーケストラを聴く⑦
東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団
〔モーツァルト:ディヴェルティメントK.136（宮本文昭指揮）とシベリウス:交響曲第2番～第4楽章（飯守泰次郎指揮）を完全収録〕

［インタヴュー］アレクサンドル・タロー／グザヴィエ・ド・メストル／アンドレア・バッケッティ／広田智之

第37回リーダーズ・チョイス アンケート募集

PIANIST

INTERVIEW Andrea Bacchetti

若きイタリアの奇才 天衣無縫のピアニズム アンドレア・バッケッティ【ピアノ】

ききて 文＝山崎浩太郎
写真＝青柳 聡

国内盤はまだないのだが、数年前からその新譜を、私が心待ちにしているピアニストがいる。

1977年、イタリアのジェノヴァ生まれの、アンドレア・バッケッティである（かれの名前について、日本では「バケッティ」という表記も一部で行なわれているが、本人に確認したところ、やはり「バッケッティ」が近いそうだ）。

イタリアのダイナミック（ディナーミク）・レーベルから出たバッハの《ゴルトベルク変奏曲》を聴いたのが、きっかけである。「よくわかんない若手が、また《ゴルトベルク》録音したのかいな」とナメきって聴きはじめて、たちまちひきこまれてしまったのだ。

ギターをつまびくような弾力のあるリズムと、甘美なファツィオリ製ピアノの音色とを活かしたその演奏は、文字通り数多ある《ゴルトベルク変奏曲》の同曲異演盤のなかでも、ひときわ豊かな活力をそなえている。また、濡れたような生々しい音色と、ソフトな響きを両立させた音質（マッテオ・コスタ、というエンジニアによるものらしい）も、きわだっていた。

あわてて他の録音を調べてみると、ダイナミックからはバッハがほかに数枚とモーツァルトの協奏曲、イタリアRCAからはベネデット・マルチェッロやケルビーニ、ガルッピなどイタリアの作曲家たちの個別の作品集、それにイタリア・デッカからも《イギリス組曲》などが出ていることがわかった。ずいぶん色々なレーベルに登場する人だと思いつつ、買い集めて喜んでいたところ、今度はイタリア・ソニーと契約して、《フランス組曲》を第1弾にバッハの録音を新たに開始するという。

そこで今年7月、札幌のPMFに登場

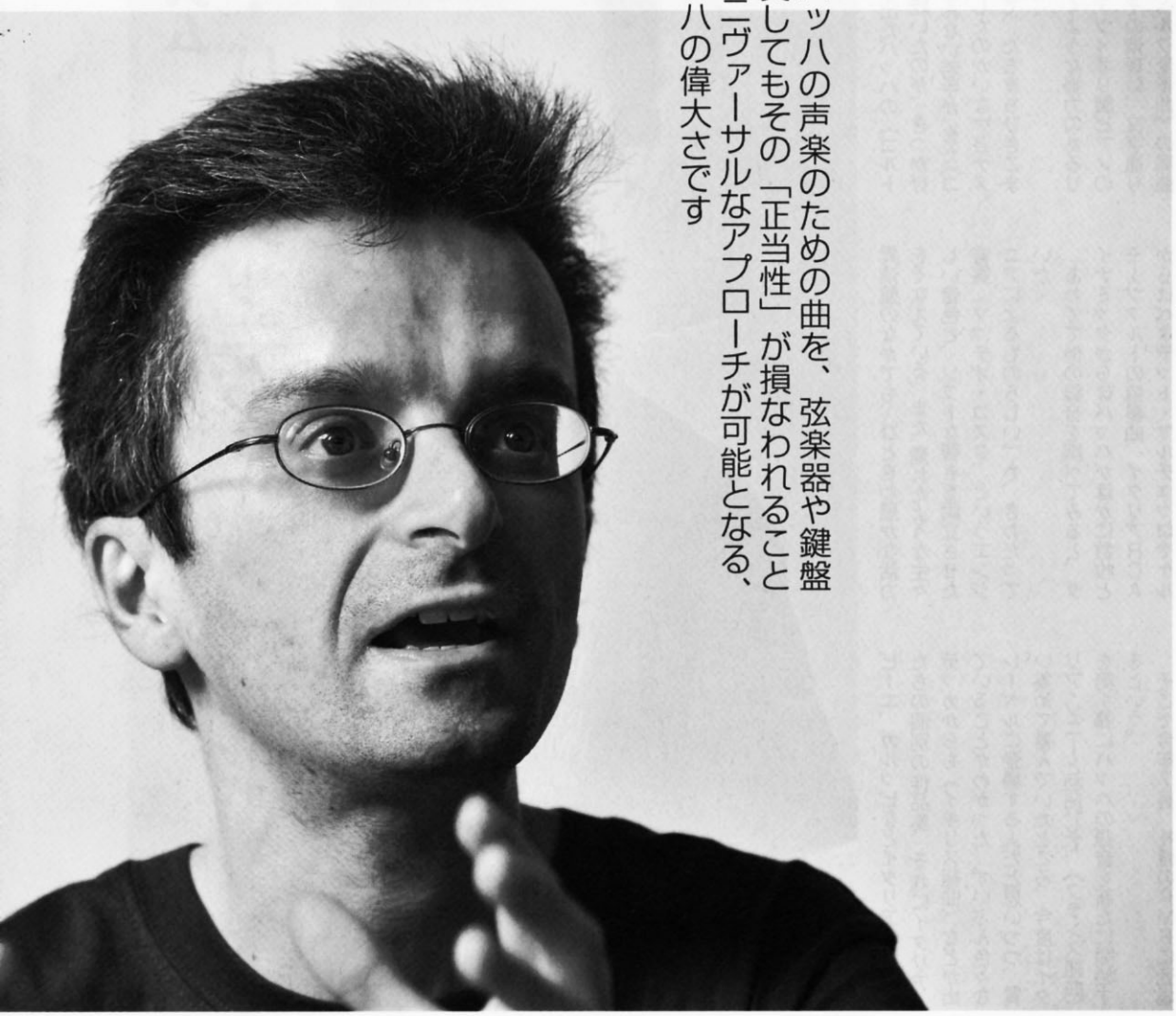
したのをよい機会に、帰国直前に東京に立ち寄ってもらい、インタヴューが実現した。とにかく猛烈な早口で、通訳のための時間など待たず、機関銃のようにしゃべりまくる人なので、通訳の方も要約した形でしか訳せず、私もとても全てを聞ききれなかった（笑）。というわけで、当日バッケッティさんが喋られたことの「要旨」を、ここにご紹介したい。カッコ（　）のなかは私が補足したものである。

PMFを終えて

――日本へ来るのは何度目ですか？

バッケッティ（以下B） 2度目です（2005年にイタリア政府の派遣により、愛知県立芸術大学でリサイタルを行なっている）。札幌は気候も非常によく、とても気に入りました。PMFでは、モーツァルトの協奏曲と室内楽、2回の演奏会に出ましたが、どちらも共演したアーティストたちがすばらしかった。若い人たちなので最初は戸惑いもありましたが、何日もかけて全員で練習をつみかさねて、見事なものになりました。それにしても、音楽祭の〝準備を組織する〟力がすばらしい。ドイツも優れているけれど、それ以上です。文化を育む力は日本が上ですね。ラテン諸国は個々に優れたところもあるけれど、こうした組織力を欠いている。PMFでは仙台の三条中学校吹奏楽部の演奏も聴きましたが、これも立派なものだった。それから、札幌のコンサートホール「キタラ」の音響もたいへんに優れていました。

たとえばバッハの声楽のための曲を、弦楽器や鍵盤楽器で演奏してもその「正当性」が損なわれることはない。ユニヴァーサルなアプローチが可能となる、これがバッハの偉大さです



ジャンルごとに複数レーベルへ録音

――録音活動についておたずねします。いくつかのレーベルにわかれていますが、これはどういうことなのでしょうか？

B いまは、バロックから古典派にかけてのイタリア音楽をRCAに、そしてバッハをソニーに録音しています。レーベルごとにジャンルがはっきりと分かれている方が、聴く人にもわかりやすいと考えています。

バッハはそれ以前（2005年）に、《イギリス組曲》をデッカに録音しましたが、これは何だかいろいろと大変なことがあって、いまは闇のなかに葬られたようになってしまいました（笑）。

そのあと、ダイナミックにいくつか録音しました。これは私の故郷ジェノヴァに拠点をもつ会社なのですが、残念ながら規模が小さいのです。私の録音も1000枚売るのがやっとだったし、NHKの映像をライセンスして発売したラザール・ベルマンのDVD（1988年の東京リサイタル）も900枚しか出なかった。あのベルマンが、私より少ないんですよ（笑）！ 2006年から11年までお世話になりましたが、オペラに重点を置くという相手の希望もあり、ソニーに移ったのです。

今後の予定としては、ソニーに《ゴルトベルク変奏曲》、RCAにはスカルラッティ、アレッサンドロ・マルチェッロの独奏曲、それにパイジェッロの協奏曲を、おそらくヴィルトゥオーゾ・イタリアーニとの共演で録音するつもりです。何ヶ月も充分に時間をかけて音楽の解釈を準備し、演奏会と同じように一気に通して録音できるように仕上げます。いまは細切れに録ってつなぐことも可能ですが、そうした方法は好きではありません。

モダン・ピアノへのこだわり

――バッハと初期のイタリア音楽、この二つに絞られている理由は？

B 演奏会ではモーツァルト、シューマンもドビュッシーも弾きますし、ニーノ・ロータの協奏曲もやります（ベリオのCDもあった）。ですから、レパートリーを限っているわけではないのですが、ディスクの上では、そのような流れになっていますね。

――そうした時代の作品を、現代のピアノでひくことについてのお考えをおきかせください。

B バッハの時代はチェンバロ、クラヴィコードなどがメインだったわけですが、自分は、鍵盤楽器の発展の流れの到達点にあるピアノを用いています。その広いダイナミクス、ペダルやタッチのもたらす音楽的色彩感、躍動感、バロック時代にはなかったものが与えてくれる、最大限の可能性を利用して演奏したいと今は考えているからです。バッハ作品にピアノを用いた過去の演奏家では、たとえばグールド。私はかれを崇拝していますが、チェンバロに近づける方向で演奏していた。私はむしろエトヴィン・フィッシャーやギーゼキング、ホルショフスキなどと同じ、チェンバロの模倣ではない、ピアノ独自の美学による演奏を目指しています。

――なるほど。そうした方向ですと、ファツィオリのピアノを用いられていることも、大きな意味を持っているのでは？

B その通り。ファツィオリのピアノは「イタリアの誇り」です。初めて知ったのは子供時代、1990年ボローニャでのことでした。2005年から継続的な関わりをもつようになり、毎年1、2回、サチーレにあるファツィオリのホールで演奏会もしています。このホールも理想的な形状で、キャパシティが手頃で親密感のある良いホールです（デッカの《イギリス組曲》に始まるバッケッティのバッハ作品は、レーベルに関わりなく、大半がファツィオリのホールで、マッテオ・コスタにより録音されている）。

アプローチは何通り？《ゴルトベルク》をめぐって

――話題を変えまして、ソニーにも《ゴルトベルク変奏曲》を録音されるということですが、ダイナミックにも録音していますよね？

B はい。それにアルトハウスからDVDも出しています。これにはCDもついているのですが、それはDVDとは別の演奏です。ですから、ソニーの新録音は4つ目のディスクということになります。

これらはリトルネッロの反復をするかどうかや、全体の解釈の点で、みな異なったものになっています（演奏時間を曲間も含めて単純に比較すると、ダイナミックのCDが約65分、DVDが約95分、付録CDが約77分と、大幅に異なっている）。

バッハは黄金の山なんです。とても簡単には登れない。その山に望むのに、毎回同じでは意味がない。毎日アプローチが変わっていく。たとえば今度の《フランス組曲》にはボーナス・トラックとして《トッカータ》ホ短調BWV914をつけましたが、これも以前にダイナミッ

クへ録音した「トッカータ集」のときとはテンポを変えて、速くしています（ソニー盤は7分33秒、ダイナミック盤は8分43秒）。

――聴く人にもその違いを楽しんでほしい、ということですか？　どれか1つを選ぶのではなく？

B　そうですね。これは聴衆のためでもあり、自分のためでもあります。

バッハの偉大さ

――ではあらためて、バッケッティさんにとって、バッハの魅力とは？

B　演奏の解釈にさまざまな方法論がある、可能性がある、ということですね。たとえばショパンなら、人それぞれによって違いはあるにしても、大筋のアプローチはきまっているでしょう。ところがバッハは違う。神がもたらしたかのような、天才的な音楽です。たとえば声楽のための曲を、アカペラで歌っても、弦楽器で演奏しても鍵盤楽器で演奏してもかまわない。ユニヴァーサルなアプローチが可能なのです。それでも、バッハとしてのオーセンティシティ、「正当性」が損なわれることはない。こんな音楽は他にまずないでしょう。ショパンで同じことをすれば、何かを失ってしまう。バッハはそうではない。その重要なメッセージは失われない。これがバッハの偉大さです。それに近いのがヘンデル。そしてスカルラッティや、イタリアの天才たちというところでしょうか。

――なるほど。バッケッティさんがバッハとイタリア音楽を録音の2つの柱とする、その理由が見えてきた気がします。今度は札幌だけでなく、ぜひ東京や他の都市でもリサイタルをやってください。

B　機会さえ与えてくれたら喜んで！　バッハとイタリア音楽によるプログラムを、手頃な大きさのホールで、日本のみなさんの前で演奏してみたいです。

Andrea Bacchetti
1977年イタリア生まれ。幼少期から、カラヤン、ホルショフスキ、ベリオ等のアーティストから薫陶を受ける。ザルツブルクのモーツァルテウム音楽大学、パリ国立高等音楽・舞踊学校、ジェノヴァのニコロ・パガニーニ音楽院で学び、イモラ国際ピアノ・アカデミーでフランコ・スカラに師事。わずか11歳でデビュー以降、ヨーロッパの主要な音楽祭に参加。96年プレミオ・ヴェネツィア・コンクール優勝、2006年ウンベルト・ミケーリ国際ピアノ・コンクール入賞等、受賞歴多数。録音も数多く、各国で高い評価を獲得している。

J.S. バッハ：フランス組曲全曲
〈録音：2005年〉
[Sony Classical Ⓓ 88691965102（2枚組：海外盤）]

モーツァルト：ピアノ協奏曲第11番，同第12番，同第13番
カルロ・ゴルドステイン指揮パドヴァ・ヴェネートo
〈録音：2010年7月〉
[Dynamic Ⓓ CDS713（海外盤）]

J.S. バッハ：ゴルトベルク変奏曲，前奏曲とフーガ BWV.846，他
〈録音：2010年1月〉
[Dynamic Ⓓ CDS659（海外盤）]

ガルッピ／ピアノ　ソナタ集
〈録音：2007年〉
[RCA Ⓓ 88697367932（海外盤）]

J.S. バッハ：ゴルトベルク変奏曲
〈収録：2006年〉
[Arthaus Musik Ⓓ 101447（1CD付き：海外盤）] DVD-V

●アンドレア・バッケッティ／ディスコグラフィ抄
（作成：山崎浩太郎／共演者は省略）

作曲者／作品	録音年	レーベル
J.S. バッハ：イギリス組曲全曲	2011	Sony Classical
スカルラッティ／作品集	2012	RCA
B. マルチェッロ／作品集	2011	
ガルッピ／作品集	2007	
ケルビーニ／作品集	2006	
モーツァルト：ピアノ協奏曲第11～13番	2010	Dynamic
J.S. バッハ：ゴルトベルク変奏曲	2010	
J.S. バッハ／トッカータ集	2009	
J.S. バッハ：インヴェンションとシンフォニア	2008	
J.S. バッハ：ゴルトベルク変奏曲	2006, 2007	Arthaus Musik
モーツァルト：ピアノ協奏曲第11番，同第12番，他	2006	La Bottega Discantica
J.S. バッハ：フランス組曲	2005	Decca
ベリオ／作品集	2000	
メンデルスゾーン／ピアノと管弦楽のための作品集	2004	Arts
ホフマイスター／フルート　ソナタ集	2000	Mondo Musica